

関田山脈 花立山、鍋倉山、関田峠

1月12日(土) : 晴

昨年、宿泊でお世話になった「なべくら高原森の家」の駐車場に車を停めさせてもらい出発(受付に鍵を預ける必要あり)。

しばらくは段々畑の中の林道に沿って歩き、橋を渡った辺りで林道を離れ、花立山の東のJCTピーク南東尾根目指す。私はウロコスキーなので、この辺りまでシールなしで来れた。

【日程】

2019年1月12日(土)
～14日(月)

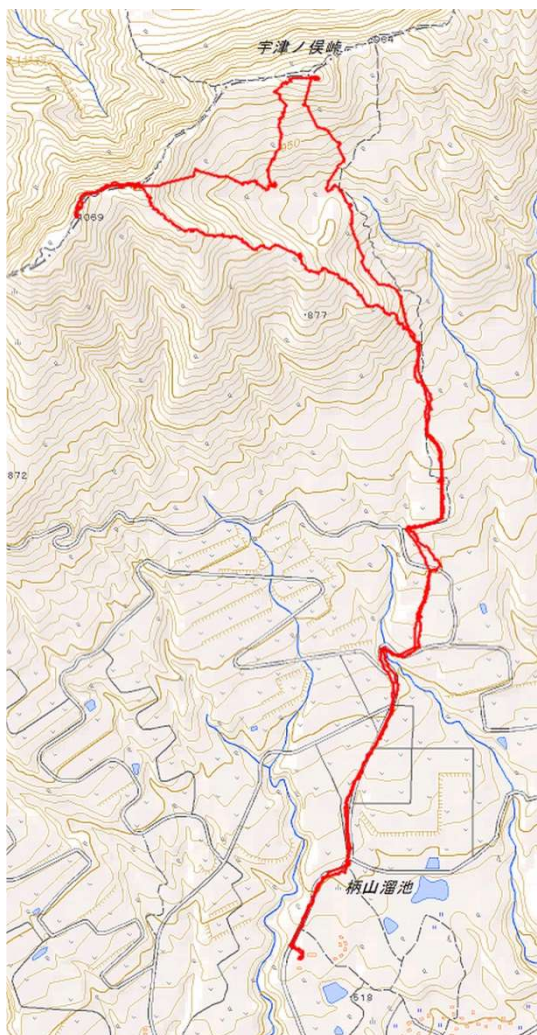
【メンバー】

中村(L)、木下、
棚橋、佐貫(元会員)

【地形図】

柳島、野沢温泉、猿橋

【記】中村



花立山山頂

南東尾根は登りやすい尾根で、あっという間に高度を稼ぐ。途中、JCTピークの東側のボウル状地形がよく見渡せる。ボウルの末端には凸地形がある。山体崩壊の跡だろうか。

JCTピークから、花立山(1069P)までは、シールをつけたまま往復し、JCTピークでシールを外す。昨年は西側からアプローチしたものの、風が強くて手前のピークで引き返したが、今日は無風で快適に山頂に立てた。

登った尾根を滑るのも悪くは無いが、東を向いたボウル地形はスキー滑走に最上の地。そちらを滑り、宇津ノ俣峠手前のピークに登り返すルート取りをすることにした。

滑り出しは急であるがすぐに快適な斜度となる。進路をやや右手に取り、900mくらいまで滑走する。大きなブナの森を登り返す。

先程見た大きなブナ森を滑り、水線の沢に導かれないように注意して凸地形を越える。この下もなかなか滑りやすい。斜度がなくなる頃、登った尾根に戻り、往路のトレース沿いに、森の家に戻る。

1月13日（日）：曇・小雪

鍋倉山は何度も登っている山であるが、今回は南東尾根に行く計画。登山口となる卍（お寺マーク）の場所を探すが、近くには車を停める場所がなく、結局いつもの温井集落終点に停めることになった。ここからスタートするのならと言うことで、登りはトレースが期待できるノーマルルートを行き、時間短縮を図る。

いつもながらに人気ルート。既に車が10台は停まっている。用意をしていると5分に1台新たな登山者が来るという感じで、どんどんと入山者が増えていく。登りは目論見通り、立派なトレースがあり、ラッセルすることなく登ることができた。尾根の上には大きなブナ森が広がる。

山頂には3パーティほど。尾根には数えるほどしかシュプールがなかったことから、大部分は北斜面の谷ルートを滑っているのだろう。我々もシールを外し、滑走の準備に取り掛かる。



スマホの地図・GPS機能を活用して、現在位置と進むべき方向を確認しながらの滑走となる。山頂直下は少しヤブっぽいが、しばらくすると大きなブナとなり、滑りやすい林間となる。雪も良く、滑りやすい。もちろんシュプールは残っておらず、我々の貸し切りだ。1000m標高点の場所までは、細い支尾根に乗る必要があり、神経を使う。

一旦平坦な尾根となり、南を向く広い斜面となる。この辺りまで来ると、登り返す817Pも良く分かるので、迷う心配はない。南面の斜面に入ると重雪となり、足を取られる。革靴だと何度も転倒をしてしまう。

鞍部でシールを再度取り付け817Pに登り返す。さらに、その東の小ピークに再度登り返す必要があるが、私はここでシールを外し、少し滑った後はウロコで登り返す。他のメンバーは登り返した小ピークでシールを外す。

東向きに滑る間は、雪は良かったが、南向きになった途端、重雪になる。斜度がゆるくなるので、革靴でもなんとか連続ターンができる。最後は、お寺の屋根を目指して終了となる。



地形図で卍印のお寺

多くのパーティが滑っていたように、鍋倉山は山頂から北面を滑るのがノーマルルートである。それはそれで楽しいが、早々に林道に出合ってしまう、後は単調な滑走が続く。一方で今回のルートは、終了点まで林の中を滑るため、山スキーらしいルートである。難しいルートファインディングがポイントではあるが、もっと人気になっても良いルートだと思った。

1月14日(月)：晴・曇

羽広山集落は初めての入山場所。林道手前の除雪最終場所に、スノーモービルの邪魔にならないように車を止め、近所の住人に念の為声をかけておく。小雪が降っていたが、林道を歩いていると止み、晴れ間が差してきた。

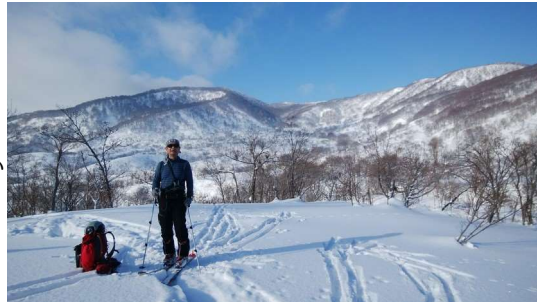
溜池（凍っていて真っ白な平原）で進路を左に取り、緩やかな尾根を、出川沿いに登っていく。鍋倉山が青空をバックに映える。

750m辺りで右俣を渡る。完全に雪に埋もれていて、どこでも渡れる。ここからは、木がまばらな白い斜面を登る。太陽が背中から当たり暑い。斜度がゆるくなると温井からの林道と出会う。途中をショートカットしながら、林道を登り関田峠に到着。稜線上は今日も風がない。

1114Pまで戻り、ここで滑走準備をする。林道出合いを目指して、林道との間にある小ピークを左から回り込む。

さあ、ここから長い斜面が始まる。雪もまずまず。山での革靴テレマークも通算6日目、大分慣れてきた。プラブーツの様に速い切り替えはできないが、不安定を克服する楽しさがある。

あっという間に、斜面は終了。最後は、緩い尾根と林道をトレースに乗って下りる。



青空の鍋倉山をバックに



【行程】

- 1/12 なべくら高原森の家(8:40)～花立山(11:25)～JCT ピーク(11:40/12:05)～登り返し 900m
地点(12:10/12:20)～宇津ノ俣峠西のピーク(12:40/13:00)～森の家(13:25)
- 1/13 温井(7:50)～鍋倉山(10:25/50)～817P(11:40)～お寺マーク(12:10)
- 1/14 羽広山(7:55)～出川右俣スノーブリッジ(9:25)～関田峠(10:45)～1114P(11:00/11:15)～羽
広山(12:10)



滑った後は宿でまったり



地酒

◆◆◆ 革靴チャレンジ ◆◆◆

前回の尾瀬に続き、今回も革靴＋ウロコスキーでの山行だった。装備は、下記の通りである。

- ・靴 : CRISPI SYDPOLEN GTX
- ・ゲイター : カラファテオリジナル ライトウェイトゲイター
- ・板 : ROSSIGNOL BC90
- ・ビンディング : Voile HD マウンテナリアリング 3 ピン

上記の総重量は2.4キロ／片足である。靴を含めてのこの重量は、スキーセットとしては非常に軽い。きっとスノーシューで歩くのと同等であろう。スノーシューよりも雪に潜りにくく、滑って下れる。

革靴の利点は、軽さだけではない。足への締め付けが、プラブーツに比べて弱い（革のトレッキングブーツと同程度）ので、長時間履いても、足への負担が少なく快適で、靴擦れなど皆無な感じだ。シングル革ではあるが、靴全体を覆うゲイターを装着するので、意外と保温性に優れ、血行を妨げないので、足の指先も冷たくなならない。

その一方、締め付けが弱いことは、滑る際のサポートが弱いことを意味する。しかし、テレマーク姿勢を取ることで、スイートスポット位置にいる限り安定して滑れる（少しでもずれた姿勢になると、リカバリーが困難ではあるが・・・）。

革靴に合う板と言えば、昔は、「割り箸板」と呼ばれた細くて長くてサイドカーブのついていない真っ直ぐな板が主流だったが、最近売られている板は、サイドカーブがついていて、トップはロッカーキャンバになっている。私の「BC90」も、ダブルキャンバーでありながら、この流れを汲んだモデルで、「割り箸板」に比べてターンしやすい。

スキーには、アルペンスキーを含めていろいろな道具がある。どの道具を使っても、登りの快適さと、滑りの快適さはトレードオフの関係にある。もちろん、ある程度滑れないと、「山スキー」自体に意味が無くなってしまいが、ある程度滑れるようになったら、山行中の大部分の時間を占める登りの快適さを追い求め、スキー技術を高めて行くのも良いものではないだろうか。



鍋倉山南東尾根のブナ森を革靴で滑る